エルド・アナリュシス

山田正紀

地球・精神分析記録

地球・精神分析記録

エルド・アナリュシス

山田正紀

■著者紹介■

昭和二十五年一月、名古屋市生れ。明治大学政経学部経済学科を卒業後、SF同人誌「宇宙塵」に処女作『終末曲面』を発表。次いで「SFマガジン」昭和四十九年七月号に『神狩り』を発表して大反響をまきおこし、続いて書き下ろされた『弥勒戦争』とあわせ、作家としての地位を不動のものとした。

以後、次々に発表される力作は、極めて論理性の強いストーリイを、徹底した冒険小説的手法で展開し、他の追随を許さぬ域に達している。昭和五十二年、角川小説賞を受賞。

『皇帝遊撃隊』『火神を盗め』『終末曲面』など著書多数。

地球・精神分析記録

——エルド・アナリュシス——

昭和五十二年十二月二十五日　第一刷
昭和五十三年　二　月　五　日　第二刷

定価は帯・カバーに表示してあります

著者　山田正紀

発行者　徳間康快

発行所　株式会社徳間書店

東京都港区新橋四の一〇
電話東京(433)六二三一番(代表)
振替東京四—四四三九二番

(乱丁・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取り替えいたします)

印刷・㈱清水印刷所　製本・大口製本印刷㈱

© 1977 Masaki Yamada Printed in Japan

地球・精神分析記録〈エルド・アナリュシス〉目次

I 徴候分析——悲哀——ルゲンシウス——5
II 既往歴分析——憎悪——オディウス——55
III 無意識分析——愛——アモール——107
IV 連想分析——狂気——インサヌス——155
V 総合診断——激情——エモツィオーン——207

あとがき——265

イラストレーション　新居田郁夫
デザイン　矢島　高光

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

地球・精神分析記録

〈エルド・アナリュシス〉

おまえをひそかにうかがっている、
盲いた壁のなかの視線をおそれよ。

ネルヴァル「黄金虫」

I

徵候分析

悲哀

——ルゲンシウス——

1

それほど醜い生き物はなかった。いや、美醜の判断には大きく個人差が関係するから、少なくともその時の私にはそう思えたと言いかえるべきかもしれない。

ありていに言えば、その時の私には微妙な美醜問題を考察するだけの余裕に欠けていたのである。

確かに、時間もなかった。だが、それ以上に肉体的な苦痛が私から思考力を奪っていたのだ。

寒い、という言葉を使っては、私をとりかこむ環境を表現するのに穏当に過ぎるだろう。——氷点下七十度、風速十五ノットの万年氷高地を表現する言葉を、実はまだ人間は発明していないのである。

私はクリスマスの子熊のような防寒具に身を包んでいた。トナカイ毛皮のフード、トナカイ製の手袋（クラブ）、アザラシ皮の長靴……これに黒マントでもはおれば、さながら子供映画にでてくる宇宙ギャングのように見えることだろう。

それでもなお十分な防寒装備とは言えなかった。北緯七十×度×分、ここグリーンランドの高地では、決して十分な防寒装備は望めないのだ。なにしろ肺臓を凍りつかすのが恐くて、深呼吸ひとつできないような状態なのだから。

雪は降っていなかった。だが、針のように尖った氷片が、雪よりもさらに苛酷に、のべつ私の

周囲に吹き荒れていた。もしいくらかでも皮膚を露出していれば、その氷片の格好な的となり、三十分を待たず凍傷が訪うてくることだろう。

そう、およそ人間の想像しうるかぎり、最も酷い環境に私は身を置いていたのである。

――だが、この苛烈な環境は、当面の問題とはなりえなかった。とりたてて問題とするには、グリーンランドの苛烈な環境はあまりに自明のことだったからである。当面の問題は、あくまでも私のまえに群れ集う獣の方であった。

セイウチなのだ。

浮氷を好んで生息の場に選ぶはずのセイウチが、どうしてグリーンランドの高原に群れているのか不思議ではあったが、いまはそんな詮索に時間を費やしているときではないようだ。とにかく、セイウチの群れが私の前方をふさいでいるのは、紛れもない事実なのである。

セイウチの、どちらかというとユーモラスな容姿にだまされてはいけない。体長三〜四メートル、体重一三〇〇キロにも及ぶこの海象は、一メートルちかくもある牙を武器として備えている。ホッキョクグマを相手にして戦うだけの獰猛さを持ち、しかもその体皮は異常にあつく、なまなかな銃弾では一発でしとめることはまず不可能なのである。

実際、セイウチの群れにただひとりで入っていくことは、まずは確実な自殺方法と言っても過言ではないのだった。

路を迂回すべきだったかもしれない。だが、この万年氷高地を迂回することは、たんに時間のロスを意味するばかりでなく、場合によっては立ち往生の危険も覚悟せねばならなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

どこにどんなクレバスが待ちうけているか予断を許さないからである。——これが常の場合であったら、それでもなお私は迂回路をとっていたかもしれない。私がそうしなかったのは、それらセイウチの群れが、神話世界における竜の顎を意味しているに違いないと覚ったからだ。

神話、なかんずく英雄神話には、あらゆる民族に共通する明らかなパターンがある。英雄となるべき人物は、目的を達成するまえに、必ずなんらかの障害を乗り越えねばならないというパターンだ。——むろんその障害は、神話によって様々なかたちをとる。半神半獣から謎をなげかけられることもある。汚れに汚れた牛舎を、一夜で掃除しろという難題をふっかけられることもある。そして、炎を吐く竜を倒さねばならないこともあるのだ。

どうやら私の場合には、この最後の例が巡ってきたようだ。もちろん私は英雄となるべき天稟にめぐまれてはいないし、また英雄になることを望んでいるわけでもない。

——だが私の属する神話世界は、私に英雄たれと命じているのだ。ここでセイウチの群れから後退などすれば、著しく世界を失望さすことになるだろう。

世界の失望など、私の知ったことではない。知ったことではないかもしれないが、世界の逆鱗にふれた結果、『悲哀』と会うのに支障をきたすことにでもなればそれこそ一大事だ。神の思惟にそむいたばかりに、思わぬ不幸をこうむることになるのはなにもオイディプスばかりとは限らないのである。

世界、もしくは神と呼んでもいいが、その正体を私は知らない。もしかしたら彼は、黒縁の眼鏡をかけ、白衣を着こんだ初老の男にすぎないかもしれない。そして私はといえば、——グリー

ンランドの幻想を見ながら、精神分析医の長椅子に横たわっているノイローゼ患者かもしれないのだ。

――なにを莫迦なことを……

私は首を振った。私がここでこうして北極の烈風に吹かれているのは紛れもない事実ではないか。ノイローゼ患者どころか、むしろ私は世界を覆う神経症を癒そうとしているいわば医師ではないか。そして、その目的のために『悲哀』と会おうとしているのではなかったか。……

私が自分をノイローゼ患者ではないかと疑わねばならない理由はなにひとつない。別に自身をノイローゼ患者と考えなくとも、この世界を神話世界と考え、神話世界が神経症にかかっていると断ずるだけの確乎たる根拠があるのだ。――英雄神話には明らかな進化の過程が見られる。総ての民族に共通するわけではないが、最も素朴な概念から、最も複雑なそれにいたるまで、英雄神話は四段階をへて進化するといわれている。「悪戯者」「うさぎ」「赤い角」そして「双生児」という名称で、それぞれの周期は呼ばれている。それぞれの周期に関して、どんな性格を備えているかを詳らかにするだけの余裕は、現在の私にはない。が、これだけは明確にしておく必要があるだろう。この地球上に五十万と生き残っていない人類はいま、かつて経験したことのない英雄神話の第五段階を迎えることになったのだ。すなわち「死者」の周期である。

人類はかつてあれほど豊饒だった「心」を、いまほとんど枯渇させてしまっている。ついに英雄神話を自らの外に求め、構築せねばならなかったほどに枯渇させているのだ。

私が会わねばならない『悲哀』というのも、別に竜でもなければ、巨人でもない。ほとんど

神業にちかい完璧なエレクトロニクスに制御されてはいるが、つまるところは一個の巨大ロボットにすぎないのである。

私は長椅子に寝そべっているノイローゼ患者ではない。確かに、私の属する世界はそれ以上もなく異常なものかもしれない。だが、その異常を説明するのに、必ずしも私自身のノイローゼを必要とはしないのだ。

——本当にそうなのか？……

私の頭蓋に、いつどこで誰から聞いたとも知れぬ、しかし確かに聞いたことのある言葉が響いていた。

（彼には徴候分析が最も効果的だろう。さほど特殊な治療法ではない。むしろ古典的な方法だよ。暗示という手段で、患者に病的症状の基礎に位置する記憶を再現させるのさ。ショック、心の傷（レー）、外傷（トラウマ）が神経症の主な原因をなしている場合、この徴候分析がめざましい効果をあげることがあるんだ……）

狂っているのはこの世界なのか、それとも私自身なのか。

——私の全細胞がふいに危険を感知して激しくうち震えた。

ときもあろうに、セイウチの群れをまえにして自省にひたっていた私は、あやうくそのうちの一頭の牙にひっかけられそうになったのだ。なかば反射的に身を後転させたからよかったものの、そうでなければ私は正常を疑おうにも、肝心の頭をそっくり失くしていたことだろう。

氷のうえに身を滑らした私の鼻に、セイウチの油くさいような口臭が残っていた。

そのセイウチは襲撃が失敗したと覚ると、それでもう私に興味をなくしたかのように、悠々と氷雪のうえを去っていった。

凍った雪原が身を横たえるのに相応しいベッドなどと考えてもらっては困る。実際、それは鉄板にも似て、たとえ戦車でさえも坐りごこちを悪く感じるような代物なのである。当然のことながら、私は背骨にしたたかな激痛を感じることになった。

私は苦痛に呻いた。呻いたが、しかし苦痛が薄らぐのを待っているわけにはいかなかった。後ろ様に転倒した拍子に、危うく風防グラスをふっとばしそうになったのである。私の貌が露出したのはほんの一瞬のことだったのだが、それでも風と氷片にいやというほど顔面を痛めつけられることになった。

私は風防グラスをかけなおし、ヨロヨロと立ちあがった。はっきりしたことがひとつだけあった。たとえこれが私の幻想のうみだした世界であろうとも、苦痛は苦痛であり、多分、死は死であるだろうということだ。

そうと分れば、私のとるべき路はひとつしかなかった。世界が望むままに、英雄の条件に挑んでみようというわけだ。なんとしてでも、これらセイウチの群れを突破するのだ。

私はリュックを肩からおろした。手袋をはめた手では、望むものをリュックのなかから探すのにはかなり困難だったが、とにもかくにも私は欲しいものを手にすることができた。

ヘアー・スプレーに似た容器である。ただし、そのなかに入った液体はおせじにも魅惑的な匂いを有しているとはいい難い。その逆であるからこそ、このスプレーの存在価値があるのだ。

――鮫撃退用に開発された薬品で、鮫の最も嫌う匂いを発する液体がある。このスプレーも同じでんで、鮫用のそれの十倍の威力はある。もっとも、シロクマ用にと渡されたもので、セイウチにも同じ威力を発するかどうか保証のかぎりでない。

私自身の生命で試してみるしかないのである。

私はスプレーの液体を全身にふりかけた。我ながら、愉快な作業とはいえなかった。私がたとえ骨がらみのナルシストだったとしても、身体から発する強烈な汚臭に、自分自身に愛想つかしをせざるをえなかったろう。願わくば、セイウチたちにも愛想つかしをして欲しかった。

スプレーを背中のリュックに投げ入れると、私は第一歩を踏みだした。サーベルもどきの牙が数十本と並ぶ路に至るその第一歩であった。後はただ歩きつづけるしかなかった。

この寒さにすっかり凍りついたとばかり思っていた心臓が、ありえないほどの早さでドクドクと鳴り始めた。無理はなかった。彼らセイウチたちが一斉に襲いかかってくれば、それこそものの五分とたたないうちに、私の身肉はメンチのようにひきさかれてしまうのだから。

セイウチたちは私の予期していたような反応を示さなかった。私の身体から発する汚臭に、彼らは先を争って後退するはずだったのだ。少なくとも、私の聞いたかぎりでは、それがこの薬品に接した時の一般的な鮫の反応なのである。――ところが彼らセイウチたちは、鈍感なのか、自堕落なのか、私が群れのなかに踏み込んでもノンビリと寝そべったままでいるのだ。

だからといって、いまさらひき返すわけにはいかなかった。私は歩きつづけた。それこそ、一歩一歩が虎の尾を踏むような気持ちだった。

――ようやく、群れも後尾に近づきかけたようだ。前方にはもう十頭たらずのセイウチを余すばかりだったが、私の緊張はその十頭たらずの傍らを通りすぎるのに耐えきれないほどにたかまっていた。叫びだしたいような衝動を圧さえるのに、事実、私は全身を震わせていた。

通りすぎた。

私は歩調を変えることなく歩きつづけた。セイウチの群れを振り返って、それまでの努力を総て無に帰すような愚は、間違っても犯すべきではなかった。

世界が英雄たれと命じ、そして私は英雄に相応しく、竜の顎のまえをすりぬけたわけである。

――しばらく歩いてから、私は磁石を確かめた。

方位に狂いはなかった。私はここらで『悲哀』の衛兵に出会うはずだった。――だが、一面に粒状氷雪となった氷原には、それらしい人影は、いや、それらしいものなにも、まったく動くものは見えなかった。

私は疲れきっていた。疲れきってはいたが、どうやらなおも歩きつづける必要があるらしかった。ため息をついて、私が足を踏みだしかけたその時、

「そこで止まれっ」

風にのった大声が聞こえてくると、その声にほとんど重なるようにして銃声が鳴り響いた。

銃声は大きく氷原に反響したが、肝心の弾丸はどこに放たれたものか見当もつかなかった。多分、威嚇のために空に向けて撃たれたものなのだろう。

私は全身を強張らせて立ち止まっていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com